拾遺愚草 中

0101871460?9

早稻田大學圖書

拾遺愚草中

目録

韻歌百二十八首　建久秋七年
仁和寺宮五十首　建久夏八年
院五十首　建久春元年
同句題五十首　建久冬十二月
女御入内御屏風歌　建久元年正月卅八首
入道皇太后宮大夫九十賀屏風歌　八月十三日
最勝四天王院名所御障子歌　建久二年四十六首
院二十首　建暦二年十二月
仁和寺宮　五十首
後仁和寺宮花鳥十二首
権大納言家三十首
女御入内御屏風五十首　寛喜元年十一月

韻歌

百二十八首　和歌　建久七年九月十八日内大臣家

他人不詠

春十六首

いつしかとあけゆく空のかすめるはあまのとよりや春はいつらん
霞そめけむそらにしく袖のはな袖のうちをる
君かためきみかのはらにをるすゑのまさこの春
うち出る波の花はたうつ梅香のはな
谷のこほりとけてたえまなきみのゆきむすふもの人の数

子日とかゐてこにし世を捨て〳〵とくたりとらの暇起八
日にたゞしんはいつもや待ちて春の林の内あひちるか花
なふかくゆかし月のおほのくと霧そうつる海路のつり江よ
さてもの消かへる雪の春のうちそ霧こめて乃れ吉野に寄
ぬることは花と月とを御へおりそ消か春なること
う移ろひて春のくるゝを志左てよう残りやうし寄そつるさ春
風のたつ花の名みいたりつ春とそゆきふ庭の花とて
ちる花よみきりみのはからそしく見て月はひろさの池
春にみあふるのはまゆれ今かうりくうちし花の名は旅
初霞の立てあたまのと待りなは春うへとかく春の海をさよ

あ移はいかみ霧し花にうれへくや若菜よかへる〳〵しき

夏十六首

春の内草の人夏草はにうえ移ては雨と移り志にき庭枝
さかてとみ移る月しさかしゝち林は代はらちるゝ千鳥の声に
夏山月のときし花ち風お未ひらちよあ浅にさ北の起
春しいか花も春りふ志人ちて又さんか移よ松そかるます
仕まゝれ林に伸く信かしましていつまのふすい岸にに
夏のよは字にはそゝ林山の月みえく信く月乃影りし
三のく花のよつ宮の竹こ忘よろしめそてこのかせとなえ衣
若竹くしれよ波うろ梅風よ由くをそうしみゝ涼しく合へ

行なやむ牛のあゆみにたつちりの風さへあつき夏の小車

立のほる雲もなくてよそへあつさを照月くもらぬ此乃大空

夏乃よハ月をまちつゝ風をまつ尾の松ふきやしかけれ

此まふすゝしさく涼葉はまん夕風のはやそしる

大井川夜ことにさわてかゝりやくいくとせかたに花を

山陰にしけといね秋の風松をあくみせしらに蓮の白露

けて梅か香松に松の涼しきよその海

ほりもてあまえのいかゝ月の雲さへかけきえの花

雑十六首

いるとしても秋の名に風の名にそ秋さひしきよそを春は鳴こゑの

いつもとは祈り志月と夜としていく度ら祈れ山のはとまつみえ

旅人乃秋此のへと旅の世よ夕日のかたをさして山の棚

雲をこり石かけのとも山のこゝろ中に霧のたまか

名こそね旅のそてのぬれのひつきは翁しりさとの宿のかくまれ

秋のわれつゝ山とい草ののひはしをさへつゝき信若風岸

山なれぬゆく岩ともそへ嵐の名をそつゝめ

うしゆいそよ秋の月に家の尾よ世山

なにはとみ月のそらに大かた秋の此のあはれ

昔ゐよ秋の月をとしかも

色ある秋の精とく

思ふよし〻のうき秋の冬より早けれ風は木葉乱れ〻
かり人もろ袖もうち払て忘れまし旅衣の薄の露ぬれそよ
衣かへのひきまくら忘れしらく木末には浅き月のさやけし
とく霧みしていそぐ袖くれは香れひかりし花の色
萬代と契まして月の秋ではおりまてくるまて秋の文人

冬十六首

とやらむ山里これゑの村々あくまでに汲ひ池の浮雲
家居よる和山のすその秋ご月吹わたる嵐とくにはおきて
木の葉ちる夜半の月冴くもるらといかにけるといにしへは海
月やそ鐘とこそ旅ならぬ海のまほり伊勢のささ戸おとろく大の苗秋

まし二ここと海より小萩の冬も言小笠乃袖の井の桁
わおりつねんのさら〻り山里乃ふるまて池より〻りと鳴鶴
みつ霧乃かつら芦の梅の君とそての禊もして小野の浦
あらそつは濁世にてねもる〻のとりし言ねかこそくる袖を
行くうのふのとて見そよ何いは流ちはかひとは何か〻しても川浦
雲をして寒の夜のかは雪ありたまふ有明の和月を汲みまる
海の舟かや〻いもと思ひけり時はかりの世とそかへきこれ
いうまて山井の袖やうつしつかへる何の近方に
君そ為君そふく鴨のうきてたの〻か池の海にゆく
濱の海の小舟の寒人鶴はなちとさくともりくるつ

かくてこそ越の雪は消えぬしと猶いはまほしうしの白山、
なにそかしいひさきたるはすゝしや雲のこゝろたえに

恋十六首

胸のうちにこそ思ひしらるれかくいふは猶たのめは煙と
志るへくもなりぬる人のひとりさえと思ひのほかなりそしく
かゝらはく神のみそかにわすれ衣と嗚りそよ秋のころ
いはぬは思ひのほかなる人の心はよそにおしけさとはつかよ
形の人に志らぬかはと哀にひとりみつくしと思ひも太え
たましひはおもはゆとおもへやれかはまやはらて思ひ満
西ひくゆかるゝ乃かなしさ紅葉の色に深てし猶そこにある

たのしきなけきこそいと数まさらむしかつきたのみつりの袖そ
露けきまさるもあはれ人はしらずんせよさらしまの行さらよ
あはれなるしかけをやとまるまにむすれそなと
とのゝ思ひこそいとはしるゝ雲のみのをこのあるを
むすひの紅てのかくれも侘ぬ思へはつりせん有の袖そ
こと枕の下の志露よいく代へぬ幸なりなれ枕の袖さ
人の君の枯葉のさしかかなくそ涙しつものこゝさよ
いのちはてぬるなきこそまの松風ゝしきほ深のたゝさ
いまはせきかねらん人のしたこゝろ染めのまの白露

述懐十六首

いつも月は浮かれ出て給ふらん今日は七夜の影よそ見え ゆかり
いつみちんはてすさく人は悲しまるゝ海の鏡のうちに見えり
昔乃おもかげまね君と祈るとつたふる君乃なかや波路の
かたのこのかみこの心は後世法の身をまれにかへる古への
三経の山ありをるとは御てしは海を思ふ人の心のうけさ
すみのいくいはあしかつをとこまし世にみこち方の折ぞむかし
あくさきは秋のさなかねての月昔しぞ清は西行法師記
けて見えしこそしは昔をしのべくらき詠みてその夜こそよ
いはれきはしき世の夜ときめをへて我思ふ山の春嵐よ
いせのやま思ふはるかに聖りあるいまさまてはやすん不るせ落よ

そを流れきこゆ晴るゝ海なかりし乃世も移ていはつかしの幸を
にのふ文はいみうつきほ乃そまこんふのひとつれ世とかゝ過
三世をへるもしといへく年古く枕よおつる秋の神の
いみせん大山の月は光ふくしは祈思ひとくるの古へ
きぬくる月の中をかは祈かる神乃山のこゝ過ふ家あし名よ
いつそ我海のしの宮と御さへこのはふ方と照を見えよ

山家十六首

ぬるもや月三つこと詠人我心のくおかしゆくらと
山本人は昔の宿むかく月しりさきよ我をかくふく
人はさくは比せぬをましいる行尾しりおつを松風の

瀧の音に風吹そへて明ぼのゝいまゝにて やよ覚えおもしろく
うきことは何よりかりにさりし頃のこと庵に枕しそらのと
ぞへありし百とせの捨かはかりけりぬし石は昔あはれくしく
いくよ世をへし紫の戸は人とゆく荒井のあとも今いさくさ
みのおりいとのさゝりそよふ事ぞふ袖は露のおちいく
我百のあかりとゆめそふは月影さしたる人の袂
いかにおもふやさは志のみえ昔せしへたてありし
山里の門田明にて人風よりは露の上に白き萩
立よりふるき中に今はかくりの宿をもて
我をあはれむ雪はつもりしにれしたまいとゝ花の色を

いさゝかは君のかりて笑とへ(?)の色そ月の影
とのよふりあまり見えしありし宿もり枕のかのへそ
風吹月のかりは我いより花は宿にも人は君あまた

穐十六首

西へゆくのかたみかて月の入る(?)月をなかめして
いつこへくまなくてゆふ雲にあまのかはゆふ煙立
まつのみにそへぬ人のなきとりさそふの(?)や家
穐衣袖は風やかよふらんとの裾ては(?)宿の露
立わかれは秋に行くかつら枝露の音の涼しは
かゝるまは人も袖にかりそめかの立りと秋やるのまし

萩とはかすかなるのうら淋しくて二尺ばかり海へさし出して月の光
見りとへの志めの名残ぞしに入江は流れり月のさえし
さとの心(?)なこむ舟にさしてみえ(?)山本にさしけふみつ松を松まと
はくちりり石(?)のみなさき夜(?)抗(?)ろつまやはく春(?)うらこ
おりつも(?)ましこ跡志てせむと思の浜一夜の衣はとふかく
とかりこ稲船乃もはかへまそのかり抱うらこし昇(?)れぬてよ
しとここ海とあかう(?)の枕のはそれの字(?)はそこいるか
りろはあふくりあひくり枕抗あそろそ抱ふくまさぬさつき
人乃国(?)や月の露(?)なにかねたちし床(?)に鈴し
うかすにきまつてね流はのとのにとあしりにとつもそあの
一首なし
杭

仁和寺宮五十首　建久九年夏

詠五十首和哥　右近衛権少将藤原朝臣定家

春十二首

いつしかとかすむ山の雲ぞ立ちかへりとけゆく(?)ゆきまの岩の(?)
みちもなき山路の中へはるかに(?)見えまくてむかしとそこる昇れる
雪乃ふるさとにいかにきくらむ雪乃志て春来昇をしらる
大空は梅のにほひにかすみつゝくもりもはてぬ春の夜の月
霞中に張らへとふかやりにかえ(?)を重ねつ柳まさは花(?)をそ
雲(?)れ海にふきゝみえて残し居(?)合はいまつりにひとさあけぬ(?)
あら新にちつて結ぶまくてふ花(?)をこそ昇(?)の　をつくる
あとへ雲にふりはし花(?)を移(?)とさ流みゆくしみ(?)ゆかの花

ゆきしふるさとわかれ[illegible]こそりとありけりのあへをかりかまし
音の夜乃夏風になき橋のうへしらくさまにほとゝぎす
うつ梅にも見えわか秋風や今日そそ川の岸の若
河まで別かゝる白雲わいつ揚の花をこちとなん

夏七首

夏もてるはふ立てより夏さうてたまへねむの花の露ぞと
たちぬる竹やさ月の夕にくらふるさとにもすゝん
山乃端ふる月宿すもねをかく秋の松やのかけに雨の
中ふ蓋いつ揚の花風吹て飛橋うけ風さへかゝる森の
夕立の松のしたかげ風をさき夏とてわかきの山か

うらすゝくさしかしたのさゆり球の花ぞ晴わ枝にかゝる
松かさゝや岸はなれ浪にもかゝり白露をさらし花香乃くゆ

秋十二首

あさゆふの枕のうへにきく[illegible]のこゑ秋の初風
秋来ぬとたれもの[illegible]つ宵そなり思ふ言の葉山の下露
お[illegible]みつて言ねとおもひそめてのそてに秋風そ吹
早いは[illegible]そのきこえの秋風[illegible]の小萩秋[illegible]
秋風ふ[illegible]もろ袖のしもと露としらぬまやかり月の宿
[illegible]わ浪のいくたびかゝりて月さへともつゆもそて
いかよりも残月をと[illegible]とも[illegible]の庭の月まの秋

夕露はまたまくなかしの秋の夜といひてかすかに鳴く雁のこゑ
秋風にやゝしく田面のいなはそよくにもゝ稲刈りの之
露ふかく森の夜の月やかゝりけん行かぬあくられぬさへなく
いつまでもにしき(?)稽山紅葉散りしきて(?)は松木枯
うきことのつもりて思ひこそまれにしもなくあとの袂の露

冬七首

冬来ては冬の風といはんとしも見しとこきおろして三百真(?)
霜とならぬ雪の志のみしくゝりしと夜秋のうらみ
神無月しぐれかる山にもうらし木の葉は(?)を吹ちらして
あつ(?)のむかのうさいつるのそでうきこ秋とてもとむ夢の月

ふいくこの里白鳥(?)はかす宿と身のうきそでかくあされけける
花の枝松の木すゑてならし君を祝ふ里まなぬ流のさい
行かむすゑ年の末年千宿われおもふ思ひの外のかそせく

祝二首

君か代は高砂の山の松月のにこそみいつをすそ
うごきなき君か御代のやまと成すの世々の末とこしなへ

述懐三首

ゆきてみんとて今の命のくもまなみ此世とのこなくこれ
かくそれとうき花を待つうきこも花をみんなのあさき水
立つをすてゝを捨るしれ若いのちの若葉のり之く

閑居二首

さくらんみこの機志れし昔をそこゝろの庭の松は見えけれ
のちはかゝる草木の名のみくちて月はふれぬ宿る

旅三首

旅衣きつゝ猶のこる山の嶺のやとかさねかさねて夜は
すみよ思ひたつ山のゆくゑをまつ人もあらし麻の月かな
雨露の袖はそてにかはく我身ともまたゆくすゑや忍ひ出てし

祝言二首

かつらきやしらぬ山の嶺をまもしまつ君のさかへくさ
まさりて猶さかへて又そへれとしくらへの千とせ

院五十首

春日應太上天皇製和詩五十首

正四位行右近衛権少将兼安藝権介藤原朝臣定家上

春十首

春の海やしらぬ昔に夜の山ゆかしとて浦風そ吹
白妙の袖にこそ思へあつしらす梅のにほひの花
霞こめし曙の山風に山のまの昔のなかの
いかてしもくるゝ春の梅の花ちりふる里の昔の宿
あつさ弓いる春の小松昔をしのふへき人の身に久しさ行

百千あるこゑてのとかに霞むれは花とやいひてし三月の日こそ
よはかまそての大宮人のかさしとやさくらの花を折そへん
も露にかさしとゆる花と君ねましいにしへやこに在りし春のやまさとは
春よいかに月はあり明の春の梢の花を夜もすから雪
年の内の二月やよひ花はさく年におきてまれな花の面影

夏十首

はるか夏の池に一もとかきわけてうつりし影のさし月は
昔くれし夕日の夕かたと山風に葉すゑてしつくはくさ
神まつる卯月すゑて咲花のゑにしたかくしはかなくも
あさかの神垣は宮の清水やのこし池はわすれまし

夕月西の月かう涼やさ太山しいかにかいつの清水なる
ことうりやしらゆきを拾ひ夏の夜は水につなける暁の空
夏の夜は月はさの涼しる此ひく柳はかすむ山のに
かたやとをさ庭の流るゝ夕日にしもくさかの夏の夜の月
山そうりこちてやふ下紅葉ちちる音の中にちらぬや
夏かつら扇はのならもえ花をきそて今をき涼しきかの河風

秋十首

秋風に萩やうや萩の葉はふかて忘るる山とさかは秋かやとそ
此月に入ねや見花のくと風ふかてまさと床の一念
たまくう宮に二人の海乃秋の月にけきくうつきてにつく水のこと

秋乃夜ハ月のくもりし山の端の嵐もはれてやしぬかハいはて
様々と首ハ以ことゝもして七夕方ひとはかりの月影
思ふ心ハ乃葉かけ見る風もあかさきそゝ様の夕暮
秋かりのたより見ゆる様風に手とひとてく哀なる
あとやされ秋の紅葉をあすの風にはなく音風なきし
山姫のねさの追風吹ちる様に有明の海に様々紅葉
地南に見へてみの別にて花なとみ後とくれる様ハ

冬十首

月日のこ松のさふ山南梅る風冬に如く冬かへりて
積る月山南くさてるかゝきこの色様に花とこゝ雪に雪

冬枯のかれはのかれ村落風のすさひそしらぬいさ
とふかり村やうひさ吹風り竹の様のこきる冬の夕暮
さえわ流る風のとさる冬月にはかるひとりゝ霜そちりくる
ありねの松の夜にあくる浦風とうしそて山の夜嵐に
氷さいくいまふ雪の寺古て村中よくる松のおく雪
あさつのにハる月にかくる島のゝてなかき二よせのこそ
音さてねあらしとこへみさ山のこの梅のさく雪の下木
ほのくれぬにこうしふかに如くかりの霞と雪のみなと一つ

雑十首

み吉野の花さそふ月日のはなる恋にかりのとさのひやまそ

昧法師まて流れいつるをもしはかつるやまとにいは
りふかきみちのしるへのまゝにより聞すくれたり事は
我身とみなさの作にあら推量代くちせぬをも
思ふまゝにいはかりとふかさにとゝらやしれるつはり
あとに猶はんとも世とこそ残さく秋のかくれそふさ
十年ばかりみとせかすね庭の草ときぬる秋の露とふき
語のやのしんの指に我思ひみよ此身羅行やまの月か宿
まは猶やひかりんのよの思草元さえみとこそに絡る
かりすこし月言に定めの中やぬときはかくの思のうつりけく

院句題五十首　建仁元年十月

冬日同詠五十首　製衣和詩
正三位下行

初春待花

春霞いかにたちなかや山より雁のて立つ心のおもは新

山路尋花

此吉野をの峯思ひしれ花とかは知れ人をおもはでふとしも

山花未遍

山の端は桜さえいぬまて花はいかりいそぬまとやゝ

朝見花

かとくも咲そる花のかへすもかや春の寝ぬれは空白て

霞間花

あさぼらけ山は霞の末はるか雲にまがへる花の木末

庭前花

我宿のかくれぬ君の家にかゝる跡の花をもうつすらん

田家花

昔より門田の苗代の花のさかりはみれば春ぞかれ

古寺花

ちるとみよ柴の庵の山の桜花ちりかかる袖ぞまされ

花似雪

みよしのの岩の目数やつもりぬる枝にも消ぬ花の白雪

河辺花

よしの川八十瀬の波のまかせても花の関とぞみえける

深山花

山伏のふかく来てみぬ花の袖はうつろふともおもひしか

高山花

雲上も人やのぼらぬ峰かかる嵐の尾上の花ぞこぼるる

古渓花

仙人のあとやありける谷の夕霧に花もいろそふ春風

野路花

行人の袖の風をきて夜の野のしをれぬる

羇中花

たひ人のつとにぬらして桜かもやれハ笠のはなさく

湖上花

さゝ浪やゆくへしらぬ浦風に縫もの海士の袖ところ

橋下花

うちわたす山櫻かけ行水のかくとまらき花の梁

花下忘月

木の下に待ち櫻をふしまて思へハきさ夕の空

庭上落花

春の夕に消をいし錦はさかりをこて梢よ花の跡らく

暮春惜花

いかにせん暮行春のなこりをハ花のかけにや惜めの色は

待秋月

今やとて待をりそしる秋の月まつこそ夜すかう惜袖

月前草花

さ木枕に花ちる野なる秋の夜の花の露をかさへるやとる月影

海辺月

かすむり夜の浪にてはかなに月を見る

松間月

秋の夜の空よ我みるや鳥へうる松の葉に月の影

山家月

とふ人もたえたる山に宿りしは何のあはれか月にしられし

月前竹風

ねもやらて月ようらみのそれならぬかさ林の竹とさや吹風

松間月

とりかへしみるは月のゆくすゑてまつこそのうらかたまつのした

湖辺月

人の釣あまのすむ月の影ともに入江の浪に秋風そふく

月前聞雁

白妙の月は夜寒に風さえて旅ね夜をとふかりの一声

浦邊月

波風も月にせかるる秋も(?)とよりゆるの浦さえてそふく

月照瀧水

秋の月秋はに照まし流れもかさなる布引の瀧

待ける月

まちまちて月より秋の久かたの空にほとときもの心すそひゆ

月前秋風

明ぬ世の床の山風さしこもる衣手よそに寒き秋の月かな

江上月

すみわたる江の村松ぬ白浪のかすそしるてらす月かな

月前虫

秋乃風のはらえゆく月に夜を疎れ衣おりしく虫のなくらん

月前関扉

疎乃野よ笛ふくいての扉の苫に寝て夜ふかき月を見る

旅泊月

しほあらきの松とこそを枕のとしきりすれ流の月かな

月前草露

草乃葉の月の明よとくると露をそ消秋とは風をな

菊籬月

こさ菊のまかきの月は見るへくやさらに残の疎の秋菊

暮秋暁月

いまは秋日秋は嵐のよこさやよい流れとこそしらぬ月

暮雲恋

こゝろ猶こよひも木一葉こゝろさして一やまたきたる秋い

暮風恋

いかにせんゆふへのたぬくれ行の木葉かこそ秋風の心

暮雨恋

けふそゝきこ秋なき秋の袖ぬらしやくらくものとせしまゝ

暮草恋

いまはいとゝ忍ふる草やしたゝんこ秋の下も哀れ秋の下草

寄木恋

ちく池に流るゝ埋木いつくれて又ちきとけはくちやそへん

寄鳥恋

かりかねに二羽ねの里の鶉ならぬ方ゆくの床は撫子

寄風恋

まひろ我思ひ秋の夕暮さへ聞ゆ二つ寝く吹風よ

寄舟恋

未ぬ人をつきこせぬ浪に松浦千よると月の影とのみて

寄羽衣恋

かくみそとたのみしをれてひかなくうき中のみとの後やそへん

寄衣恋

みくさすゝやゆてやふかひのすり衣ゆく袂ひらきこゆ手洗のみこ

女御入内御屏風寿 文治五年十二月

月次御屏風十二帖和歌 右兵衛督 定家

正月

小朝拝 別二首

いかと見えくるゝうれ庭の雪しるし立かへて九重人

野遊 小松原 子日 二首

小松つる君かための千代の宿をしる人にかへかは

山路に霞立かへり朝住吉の松ゆかり

春霞たつはまゆくすゑとおしこめて見ゆつゝ遠し佳若雲

二月　春日祭禄次儀

みかさ山さしのほりたるひかりくれは松かえにこそ神のみく

花中鶯有所人家あり

ゆきまわかれ思へりはよ宿とふくまてさわかしくも

人家并池邊に梅花咲たる所

とよられなかいはかえみそえかわり植てしちたる梅のした風

三月　池邊春鶴

青柳の池のまえにかゝんかね遠いく三ていて千鶴とはさる鶴は

人家庭小松ゆかりに咲たる所

春の日のあつかりし思ひまして庭の面に昔にかへる宿の春流

山邊井人家に梅花けりよ咲たる所

わか人のいはりいかなりむ花さかりのことさらに代にも久しかれとぞ

四月　人家夏衣かへたる所　卯花垣根にあり

なつきぬる今日よりたえ衣の袖いくとせをかさねてぞきん

鴨下御祖社神舘祭葉付たる人舞たる所

ちはやふるかものみあれのきさき葉をへていく代のかさしとはする

又菖蒲あれ

あやめくさ今日よみてたふくるひとり菖蒲はあやめとこふにちよそ海にもせみ

五月　人家の雲のまえに菖蒲ある所

いくのゝ人にまく摘くけるなの本すゑにて有けむ之

菖蒲刈 けふは人の家に葺く月しるし

あやめ草みなさ取りと千代の秘しれ

人の家に軒にさゝなみ

たれすまて取りみよ人の床の花の袖の

六月 山井 人の袖涼しき

まつ日に暑き涼しきやまれ涼しき

此人の枝の下草の露

人は夏の梅さく涼しき枝の下草

河辺 にて 秋

みそきてしも河原に年ある代をしも流

七月 星の家に秋風吹く

て此月のひかりに秋きぬとすゝしき秋の風

此花の露にさとく人の集

よるの人にもいつはりの夜の草木とくらむ

春日野の庭の露

きく日の秋の日のおりに露に庭の露とつく

八月 人の家池にくく月

大津風みてやまての月のとつと夜の

お夜の笑ひにしもに

笠のかけはさやかなる名にゆかりはふかうかき二代のむかしの月の影

田中人家あり而

秋あ来る山中のかけ深かゝりてあさ海ませる世のたゝ晴ゆく

九月 宮中に菊盃を賜ふ事也仙人並而

かこうりうち山路の菊の露をわけ古しい千代と契りしとそ

山家井人家紅葉とくに眺而

かうよう花は紅葉はあらしとの錦か人のこゝろとそみる

海辺三方ニ書而

立田さる浦まの岩かせ月の数かうりとあらんみゆる

十月 海辺二ケ所并二而海士人塩焼あり

京の代をいはふ代とつくりさかえる君か御代まていはふ速

細代にあつまりぬ也而

千代は猶その御代は代々へてことふく人のたゆまさりけり

祝言家にいはふせる所あり而霧あり

引まはしくれの花よとそ見ゆるあしまにゆきうつりの毛衣

十二月 九世節業人之時

白妙の袖のいはかさ錦まてあふとも錦とさへ通詩

紫宸殿禁裡儀式

年の禅は流るゝとしのはや来て一年ましてすゑの海の葉

神楽二十鶴かりたる而

いそき三十日夜の儺より雪降しかは此ちうさんの名もゆゐ

十二月　内侍所御神楽儀式

うちきんてまゐる三日御神楽にまゐりてあふみのかゝみもれとく

山井松竹雪浮橋あり　南殿あり

くれ竹に松の末葉の折ふしも千代をこえよと雪の中に

紫宸言上下人南山より松きりて献りしに

民部卿為家のいはく千代と松が枝に数そふる末の言の葉

沼法印屏風和哥

夏樹陰納涼

ときしもあれ木の下かけに風もなし夜とそたえぬ松の下かせ

冬　池辺雪

ありつゝいけへくらさむ池のほとりかき結ひ千代のもとゝみなせ

入道前太政大臣九十賀時屏風哥

屏風哥十二首　建仁三年八月被撰定

右近衛中将藤原定家

春　霞　若菜　花

夏　時鳥　五月雨　納涼

秋　擣衣　月　紅葉

冬　千鳥　網代　雪

花山の桜と雪の名を年ゝに千世のまつりとそ見る

名所御障子和哥　正三位行右近衛権中将藤原朝臣定家

春日野

まちわびし嵯峨や梅か枝雪なから今日ハ若菜つミてか

吉野山

みよしのハ花にうつろふ山なれハ春さへみ雪ふるさとの空

三輪山

ゆふしてハいつれの時鳥杉てのまつと誰かきゝけむ

龍田山

たつた山中ゆく梢の色かへて鹿の音さそふ秋の山風

泊瀬山

小泊瀬の峯の常盤木吹しほる嵐にくもる雪の山本

難波浦

夏かりの芦まの海ハとをくとも葦のすゑ葉をかけて白浪

住吉濱

うつり菊のうつろひ秋に忘草すむ岸の松の浦風

葦屋里

あしのやのかり稲の床の露ならてあはれはかなく宿る月

布引瀧

ぬのひきのたきの白糸夜もすからたえぬ人の心あらはれ

生田森

一 須磨は明石の浦風に名をえたり いく田の森の秋風の下葉
和田浦
あまの苫屋の明石やりかに 須磨の浦しほ焼く煙の末
吹上浜
塩風の吹上の浜によせくる波の花さへ昔に恋しくる
交野
風をいとふかくれ蓑も鳥のなく野の桔梗に露なる
みかの原 湊川
こゝの里よりおいをのぞみつゝせき川せきこゆる浪の音なれや
須磨浦
須磨の海士の塩焼く煙も秋ふかくなれば霞の浦風
赤石浦
明石のうらうらちかくこゝろも思ひやる波の月影
志賀摩耶
志賀の世にあはれ名のみにて浮ちる年月のながめかな
松浦山
まつらやまよりの雲も松浦にかゝる月影
因幡山
これやこのたちわかれいなばの山の峰におふる松
高砂

たかさこの松はつれなき色よりもかねの響はさよ更てなき
世中は
むかしの友なき末の世中になくさめかねつ
天橋立
あからめもいく千とせかつゝくらん波に松とゆるらん
宇治川
網代木や波の雪間に袖ぬれて八十うち人のいさやうらん
大井川
大井川まれの風井に年へたる紅葉の錦なり有けり
鳥羽
うへしも千代の秋の空は小鳥のさえさえあらしに松の梢風
伏見里
伏見山霞の麻のまゝとやかりねの床の秋のとね屋
白川
いつも河川浪やくゆるとさゆる夜の友と霧立て
小塩山
昔より神の小松をとりもてる神代の影のみとれさき
逢坂山
いかにもゆく世の人の花のもとゝめさくら山わかれかへしき
志賀浦

しつの海やかりしまをかけんの音のとこもと霜ハふりけり

鈴鹿山

秋はなほ夜はにふかき山の紅葉ハ小袖にそふ

二見浦

まそかゝみ二見の浦ハみかゝれて神風きよき夏の夜の月

大淀浦

大よとの浦よりけふはなさけに色はよそくもかへりける

浜名橋

春人のうへまゐる浜名のはしをわたりて松の志ほ浪

宇津山

うつの山うつゝにけり暮の月いかて思ひ深からん

更科里

風わたる山の月影秋ふかみさらしなの里は雪

富士山

時しらぬや五月しもまたしらぬ雪は峰の麓にやふるらん

清見関

清見かた袖にふれ流るゝ月とゝめかねてきまこの風を涼しさ

武蔵野

むさしのゆかりは尽せぬ色なるに草の原

白川関

くるとあくと人もとひこて宮しろの白川とも定

阿武隈河

おもひ称宮子にふる風もかしきはかく浪河の名をとこそ思へ やきくへ

安達原

行過ゆくかたもしら原はしと世も深そぬ歌こそ行の

宮城野

うつりゆく花の千草にこゝろして風のさらさら宮木の原

安積沼

かつこゝろかさるゝ秋の夜草にかつみこゝれ花ふみてる ほり

鳴海浦

かたみにも宮の衣手吹くしほ風かりくのよの月に不浦

塩竈浦

霞にや花にやゝまの色はいかにとふあさなよとしほの海の浦

建暦二年十二月院よりめされし二十首

冬日同詠廿首応製和歌　従三位行侍従兼左近衛権中将藤原定家上

春十首

春日山峯の朝日のさしのほる音のうちとけ海やのこん

梅かゝのもれ海風音もはゝ霞なとしつかにそれかたへの花

霞を行く山の花のいまもきくれゆかむめ

雲路ゆく雁の行ゆく春のありゆくの空

あく千りかもやさしきの春柳の枝は淺みどり春の舟

ゆらぬの声もきこゆる人まては桜しかるもしるし

そらのしへさまちの松かしにふるしてやさしき春の山里

みつや瀧は河のなかれ流れは神代よりの一つぬ、色をみるさる

いくたりの往生の二ろどこうぞんじ音まいまた外は三重の

冬のみくさるふ春のとこ神は又やいふきのの山風の色

無五首

どのつらさ千夜の浦まくしら磯に代をしろかせんさかはしく名もし

手の京々どそ池のそゝつ中に字をまつ月のゆるし

おく波は気味の夜持ちまちる鶴をいはゞの名は志のみし

秋の冬は内て以後ちかくそのしへくたさしか雨は深くつ里みな

翠とさいし未なく京ぬはさしいしつゝしかの露枯

雑八首

住の毎れゆくちらしいとあらゆく神はきみ方にてはいりしうちをの初め

花ころのやれ千代にお代なりていとふるおきのそらを千とせ

松不乃としゆるき一家の中東にいるたる色にみつきてとものと

月、かうまさまてしめの寺く我はみつこ寺をいその子代の初

御代をおりしいまくてそいのかしとうる万代ていとやれそ

仁和の月次亮名乃言の法よろろくさ世

百言めのきのまつにしありかくいは積て以一年まかも源忠ハ

詠花鳥和歌各十二首　参議藤原朝臣定家

正月柳

うちなひき春くる風の色なれや日をへてそむる青柳の糸

二月桜

かさしをる道ゆく人のたもとまて桜ににほふきさらきの空

三月藤

ゆく春のかたみとや咲藤の花そをたに後の色のゆかりに

四月卯花

白妙の衣ほすてふ夏のきてかきねもたわに咲る卯花

五月盧橘

郭公なくや五月のやとかほにかならすにほふ軒のたち花

六月常夏

大方の日影にいとふ水無月の空さへをしき常夏の花

七月女郎花

秋ならて誰もあひみぬ女郎花契りやおきし星合の空

八月鹿鳴草

秋たけぬいかなる色と吹風にやかてうつろふもとあらの萩

九月薄

花すゝき草のたもとの露けさを捨てくれ行秋のつれなさ

十月残菊

神な月しもよの菊のにほはすは秋のかたみになにをおかまし

十一月 枇杷

冬の日は草木のこさぬ霜の色を葉かへぬ枝の花そまかふる

十二月 早梅

色うつむかきねの雪は花なから年の内よりにほふ梅かえ

正月 鶯

春きてはいくかもあらぬ朝戸出に鶯きゐる窓のむら竹

二月 雉

かり人のかすみにたとる春の日をつまとふ雉の声にたつらん

三月 雲雀

とふまてくいさりの床は春さりて雲はるかにと声をたて昔は

四月 時鳥

時鳥しのふの里にさとなれよまた卯の花の五月まつ比

五月 水鶏

槙の戸をたゝく水鶏のあけほのに人やあやめの軒のうつりか

六月 鵜

みしか夜のう川にのほるかゝり火のはやくすきゆく六月の空

七月 鵲

なかき夜にはねをならふる契りとて秋まちわたるかさゝきのはし

八月 初雁

みかさ山秋のすゑしも松の声も霜おとすなる袖の秋風

九月霜

人知れずいろふかき草の袂ぬれとや秋まつ霜は結ひそへし

十月霜

山里の紅葉もいろや霜のさむけき竹葉のそよぐ風の寒さに

十一月千鳥

おきつかぜよるの河音に千鳥なけ夜半の月いとさむけみあかし秋

十二月氷

おもひかね池の汀に立る霜のさえ年をも積る我も人にや

仁和寺宮五十首

詠五十首和詩　民部卿藤原為家

春十二首

初春

春乃来とけふのしるしやかすむらんふるさとかはる山乃霞を

雪中鶯

梅乃葉はいまだ雪をふみもつわけて鶯なくらん

橋辺霞

朝あけて下さびしかる霞にそ渡るかはまくらの中の音

羇路梅

たびころもゆふてありしを梅の花うたてしたくふの袂かほらん

春月

山のはは霞ばかりの花なれやそこの比ぬか清はさし朧月

岸柳

とめくる花にかはれる緑色や見らん花待比の岸の青柳

梅春風

梅まくらこやよひかくれぬ香の色にほひの床よ春風ぞふく

花比梅唐

いく霜を月松かけて白雲のはなやしく雪にかへらかりかは

山花

三月の山桜しとまれはゆくく花まちす旅とまれらん

咲花

桜花みな世の中春の風そよとの咲わたるらん

庭花

咲ぬとくきかれぬ庭の苔のみなれも春かぜ花にちる

河款冬

山吹の花ありて世のなかしはの名のみもわいて下ならん

夏七首

新卯花

我さそりここれ秋やう人生しま中にそて白くさかる卯花

又田舎

うへしとそしけりのさら里ことに槙の葉紫のねかけんへ

里時鳥

ほとゝきすあかしのうへとおほあきれかりし里と海なるらん

思時鳥

まちえてはおくの宿の時鳥よその神垣にゆつるやまん

水橋

橋かけ花ちる川の中の月にうつるはさへまつるや小舟

籬瞿麦

まそこらのあめのふりにかきの下りまて秋のまゝなるの物わく月

江蛍

あさくらにたまりし小舟おきつしほかもしてく雲風さへにしらう

秋二十首

早秋

天の河はやせの流れ風さへて床に秋ちりしかさゝきの橋

萩露

ふくる夜のあきかりのとこよせもなき夜そ袖のうへさへ秋の露哉

萩風

いかにせん音かへ下荻とよみの野原の神風

鳴虫

秋風のたえまにむしの鳴く声は花のなかくおしき宿の秋かな

山家月

月すてゝ世を隔松山のかげよりもぬしきく柴戸の柴とこゝ

野径月

しらぬ野は露とく秋の草わけは月と露とさぬ人そなき

田中月

ふりゆきさ床の陰もと清身はいかなりとも月をみんかし

暁床

みつ鳥はよめつすや月とふて行ふし床の有明の空

河霧

あさ河の河れたる床のさとり　袖にぬるゝ人つらん

擣衣幽

秋風にわかき擣きてしも衣及ぬ里人とや思ふらん

夕紅葉

高雄やのそこていかずてかけて秋の夜はゆふさりぬるを

残菊白

おきつ紅にそめつ秋の白いろていさしてや菊の花の下露

冬之首

翔河舟

秋立ちてかりをしき鶴河岸かり雲の竹河舟の

河霰

いくよかけて流くるらん河竹のまさこ下かくす花をとゝふ

池落

白鳥乃下のかしらは絶ねんの清かさ池の汀りみ

潟千鳥

たな海ひくあけのくもみの友よふと浦りさる奥の小嶋よ

松雪

下葉しと積と積れとなくし松まそうつる峯の白雪

湖雪

まはの海やけ乃わの草木まて今かるさゆの雪の朝

晴の朝雪

おしいやまかけかよゆうのとろりし恨ねふしよつりぬらく

恋六首

寄雲恋

いこ海山いつとふの峯にかゝる雲ふきてかりしい消けれは

寄露恋

これのもくらるを星とりて行くよらまとれ恋もさ

寄煙恋

いかせん海士のもしほ思ひあれと立のほりしよる海風かな

寄草恋

すゑまてと住の野かりし秋の露草かりぬ庭の下草

寄鳥恋

あふ坂の関まてと来る鳥の音なく／＼たゝす暁そうき

寄枕恋

おもひあかす夜の枕にみつる涙のまくらしに涙は流さ

雑六首

暁述懐

とにかくにまた有明の月をみて経てにけるしきに涙こほるゝ

閑中燈

ほそくともかゝけ窓のともし火のありやとたつねてふ宿

山旅

ふでの山ふみこえし人よ霞ゆくそこら旅は旅人そゆく

海旅

行末の中つみちにつゝむ浦波を渡く舟人

秋之旅

野への露みたりみたれて秋萩のしたは露とやとせん

寄桜祝

咲きはなの梢の千とせいはひぬるしく人の家ではえそかたき

桜久…

詠三十首和哥

早春霞

立そめて今やいく日の旅まくらさこそ露けれわかさ衣

沢辺草

いつ方にゆくへはしらん秋の露けや沢への庵の下くさ　庵イ

暁梅

枝にうつる月のくもりはにほひけり有明の月　さきイ

花満山

花さかり空にみえまかふ白雲はたなひきけさ吉野山の遠

江上蘆

かりにこきあれ小舟つなくやはあらしまくらそなへそ

濱卯花

海かさの沖津白波しらぬ浪のよするに岸の卯花

暮行鳥

夕暮れの末の下草にゆくる鳥ねぐらにかへるつま恋しけに

高陵梅

うつしみしおもかけもかくれて雲のたえまの影をあはれ

月前萩

萩の葉にしのひてふくや秋の末にかかる月の光

冬風

つれなくも冴ゆる夜の風の音たえす枕にきくかね松風の声

海邊庵

孫乃庵は此方にて須臾にも書をとらぬ所遊にてなく
宗之落
白露くとて草の葉せんしひかりしいつも夜星れ古さ哉
〃庭橋夜
見られろ真星れさ代夜なりし月のみよくんかり
旅宿某
あさ露のいよときちかんけのきれ一よれやしよ見かりん
深夜千鳥
北の様露にいろく笑深のさよ千鳥身のうき様もえをはるまま
石いこ也

流吉竹まま様の雲るれと落もて此の声諸返ほ
守歳忘
いついえよおき上り花にくちそてねむものと残れ秋のなごりに
稀言
まらいかきあきうつやむ夫の行きれなと志ね年ね暮りし
借言
見もかねやえれしつてり一言よ花のちりおいいぞこうといて
憩言
かぞてみしへいさのよ石かんてこ和は身さき秋の志あれ
元忌言

身を捨て人の命をおしむとて有ましものかはしやらう

旅行

いかりうきこゝろ新しき道をいて行ゑいあまの山のはてや白雲

旅泊

うきねせてとまる湊のまつ風をきゝて人のよいそく言は

旅宿

山住や旅のいほのさゝ枕ゆめもむすばで月にとひこと

山家松

志のたれかいつしか小倉山のさゝれ松よそなれくるしき

山家苔

志るまいつみえんの下に住苔の昔のさゝ跡の地思はん

山家橋

行方人の昔のあとはしかさねて捨世と思ふ人志らるゝ

寄紙祝

青月山星の木のまの月を捨いひくりみさまそ神さまかん

寄水懐旧

すゝみにかつてねはの花のもとうき波けんの昔を遠さ

寄雲述懐

見て世のうきはくもりねまれ雲たのみをたのみてそまさ

寛永元年十一月女御入内御屏風和哥月

次に屏風十二帖和歌　定家

正月元日

春きぬといへは春のしるしとて松しそ君の千代はふかる

若菜

とふ火野はまたふる年の雪なからけふこそ春と若なつむらん

霞

春のきる袖ゆたかにも立霞あまのかく山さやけき山のは

二月梅

我やとにおりし雪とはゆくらし春は木ことにしろき梅かえ

柳

みとりなる柳のいとはひきかへていく千代あるき二月としはる

桃花

とくあけれ露河しまふ春風に流のなかれ花をゆきさそふ

三月桜

山桜花のしたひもときつゝあかれぬ色に春の衣手

款冬

谷川の岸にしけれる山吹の深く深さぬ色の山吹の花

藤

紫の雲のたなひく花かつらは立ぬしぬらし松の藤波

四月更衣

りんの祭はいさゝかすみそめて哀そのかみ椿かけまとゐ

葵

くさのはよかくれあふひ草よろつの色もいく代かけん

早苗

さやまたのかみなれやいせをりしをとくるなへのしやひさん

五月菖蒲

いのちとて引しはにのあやめ草けふもまさきたちふいはいな

郭公

時鳥とのとこいの枕の人はまちし五月の夜を見てきそ

瞿麦

きみまさる[illegible]花の[illegible]ゆきこにいわするやまとなでしこ

六月山井

君の御夜のしられぬ杣木森の下風山の井れ手

納涼

風のまへ内枕のもんの手向草よりひくに付て末や[illegible]

六月祓

夜衣打ちくゆとに河原とみ祓みそきするせたれ[illegible]て

七月秋風

おきんの流れあさ寒しき秋風は枕のまて猶そうたに[illegible]

槿花

りうんのはいかこゑあつまらいく湖の世へ流し秋萩紀

玉

白金のたや松宮に忠まもし萬歳一とふ千代いやまさり

八月麻

草はすし及の千草にすりくと比山の錦忘れ経

月

こよひのひかりをへにけ月かけきさんの杜の

雁

秋霧の立を待しつ雁の音は都の初かりれ一声

九月菊

おいとせく菊の下水千年の流へは皆人そ千世し住へき

田家

民の戸の豊なる時世にいもとやそ孫の棲にかきりなき

紅葉

錦かに深の露のく染めぬし紅葉は千きらく寿へ永そかな

十月冬鳥

池水にしもの毛衣はとや孫の代にかゑるや水の目ほ

千鳥

あら浪の浮来の千代を見にかくしも千鳥ら海小高か

初代

あらしや浦のちらくて々月よおつる末の松にふし

十一月霜

浦にすむしらぬもとも我ゝ千代のかた見てそ

鶴待

いにせ北や立てうしさるのこまえ中に君いふ

炭竈

国とみる民のけふりぬ猶たえて雲るゝ山に寒しすま夜

十二月海

春の海や沖こと照るも冬の月清なますそれかえるとそく

雪

汲若水のえ重ねつゝ見るいけえ久のあり

柔書

あつりの山路よ氷いさ半のこし春ぬるり雅や長

泥絵の屏風石清水臨時祭

ちりしせ衣かすりの人見えのかさす桜そ

重陽宴

九重のいのつゆりふ菊の枝にこと人の霜しそへつ

拾遺愚草員外雜哥

一字百首　一句百首　已上建久元年十二月

伊呂波四十七首　二夜同二年六月

文字鎖二十首　同年同月

三十一字哥二夜　十五首哥

文集百首　建保六年　四季題百首

四季題百首　建久二年冬　韻字四季哥　同年

已上行時依當篇損積无道依有其恥徒不加入家集

其中五首有撰取哥　仍追書入草子奥　建久元年

六月有觸穢事於籠居依徒然書出上〻字百首時詠之

春

けふ乃年とゝせかさねとや霞に天に立いそぐらん
さゆるかはいまた冬なる月の光かをりしてねやに谷のかけ
素月山てらをしらぬ字に雪消てさくら草を昔はまんと思ひけり
是きこえそよたゞにきをみまほしなるうるはしき花のかへる鶯れも
太山木の霞は雪のところてふ雪をひら草のいろは
春乃春は柳見の霞ふかくしてひとつ秋の昔のわかるれ
あらしさ天宮人のかつさうみなれゆくひの都ぞ見てよし
都んそてまく西都はなんとかわる所ゆく霞は梅のさかひにも
昔乃夜すれ月の月都のたぐひなりとまたかくれ志はれ

あるへき命とい所と思ふなれはと待へき花の都かな
毎様をとてんのかゝりつくさん花とかすみどらちれは山々
宗としは花の風のこね様はあるなれ雪を袖にはらひつゝ
情ありはわてかつてむ所のましき言なくちれ花のつね
流のちてし者は義の白ら様はゆくて思ひをそむまんはそのかる
き乃園や此との濱のえゆ風し春はのさけくぬれつゝよ
梅のうら様つゝ雲れに雲あるとうかの様かはあつゝまして
昨かまそのかり志花は毎さてけふは花のもゆら乃床
つれさく昔の迎様また月か宿はふて長らかなく
花ちりて様さへやとおりふるいはやくかは春れゆかな

立かへる春の例のかつことゝまりて花ぞてのこし寺を知る

夏

かくてきのふの月日のうつりかはりてうすき白かさね

夏きつゝ垣根の雪の名残なる夏といへる人の卯の花

をりかへしてゆふ日かげのかすかなる窓の小田しきうくひすも

きつゝくこの[illegible]そこの竹のかけのなくさむる

すゞみや[illegible]手にしてそ夏の[illegible]松の木陰

とぬひさし[illegible]して[illegible]雲と流れて月

この[illegible]せ屋の垣ねし涼しくさ[illegible]の花

草の葉の[illegible]一本[illegible]村の里人

月待といひてそ涼しき[illegible]松や[illegible]

[illegible]の命[illegible]夏更

富士山[illegible]思ひそらして[illegible]

夏の夜[illegible]滝の[illegible]小月の[illegible]

ちらしつゝ秋の[illegible]

そらをゆく[illegible]

まふ[illegible]月日し[illegible]夏の[illegible]

秋

との[illegible]けて[illegible]

[illegible]

なり月乃七日の月のあけくれハ梢くまなしあさひのさ
やうやうもいくえ瓦やのおもて秋風あらくなりの風も
こゝろ露のそてのうらハうらさひしさそくく砕の風ゆらくく
庫乃忌尻乃凡しをしるく秋のあハ狩ハ心ひかるゝ庭
此つハいはは萩の下露ねさこそ狩ハ名残く砕の中ゆ言
を海乃湖の秋のくれ風よ西狩をみてすしいる西の瀧多く須磨し
すそつるハはほ田やよろしき秋しりはの月の夜の
雪之三尺本の宿ハ下ハ久付ねにつらり月のあそとせハく
ニらひとあひえまとるめのむかハへいるゝき秋のより月
なりゆくまゝ花の秋乃宿ふのことてあるらう月の夜

らてなきゝ月乃ゆくまゝとらへく竹ハ心のそてとらやや
かゝるやの人ゝるき露れさえりし秋そうハ枝よこ雲ね
松風乃ひゝきよめ心ふる哀しるめへてさゝ緑こそあはれ
ろうこゝろやすらさとかりんなはハ苦て草乃まくらし花の久く
露らつむ色花ゟ下ハ枯葉しら久ゝるしさもの哀さ
也おりそ世なるを秋しはりかり指の目かれあされ久なる
みよせハ雲乃指み紅葉らく秋ぬゆきり九心よ凡風
姑りつる木の派しハかゝりたるゝ露ある之ゆる砕の行れ小

冬

え渡くなる雲ハ竹ゐの心にはゆる小本のくれおかし木枯

つてあらにくのこゑハ花は月紅葉なとの寒しきことさと
落葉なとふまへしてよりは枕梅しは花とめても寂しさによ
きりきりす鳴かく秋の原なと霜おりく有るてハ去らしては行かす
そしの月の浦なといまは消さらしんなき世こそあはれなり
のこりなく枯れゆく草の冬枯はいとえくらしの花のこゑ
ほのよめの有は志らしてあらしちる花くらくるこれ月のよなく
すりうや梅そは夏の野辺にはいくたの冬は雪つもりく
みそとへ見えあし海の浦しは霧たちてさりけるは何とも霧ほと
風さらく山のさて原雪降てふこそあはれなる消わる
冬はまこと有明のこゑしとへて一声はこまよあさき夜との山

うき様なるかはりつつは字に御方言とかさらす字は類は
つまはの井つれなしいと言葉にかなしくあるかなしき
皆人の素を心からなる事も言の葉わる字まへ如何あれ
ほは言わることいふをかさりたるあれは此世にありぬゆへ

恋

大かたふきこしてやさしく心様なるの心深くめでたし恋様
世おりふ恋の有り所は心ありしく思ひもとめそれのこゑはつくへし
こと人はあることそみるそ様とへくいそとふ花の形の草
名はまこと有りけり字に様をよくしきてよそ心ひ流れの
まれに見は何にやそかならす花柄よく苔の人やたのめし

末枝うつりてまれ志らいの雲月をあかね秋よ帰りて
人ゑまね源のそこらのんくらしり浮かれて雨にふかれ人かれ
飛ちりつきこ聖りいまくれけし人のあくのしくめいとは
そしくしあいてもくへさ月日といかうてし志をさ志ていなま
てあむしを梅桜こよあかね山乃井れ人は寄程ゆく秋の日ま
うれろゝん久よいかさりみ人宿山竹白は志らぬ所沢山ハ
ちりつ月枕し志をを秋くらてらしいう程あき大床す森い
りつうてよるくにゐの月とかけて言にん人のゆく恵まのと
程あし森おりひよかしあく秋のまぬまいかろりぬ春い志らを
すゑの松まんのにい所てかろうゑこまてま清のくうてをもとい

一 椎

あみよかりいかさしてあかふろてんいりんろへさひかりくらみ
かさことさむりしいの煙そてふくあ程とのこし浦の夕ハ
なるかえて志京まて山の村竹多の残ゆく秋よ久くりいて
ゑあのゝおりひとかえ秋う程いそしいあつね秋の寿ハ
く雨中やうきうり山乃兼をつていさ志て空のそこれ白新
納未や月よふ須ちすあまんとゑのこてにね稿の森よ
行くり流乃とまや事色のろうきてらかといかろうみや
梅さきふ代いろく時の露けくい草乃枕のゆう法ろり
かり衣露よりくゝ梅ら代をき森志ゆりみゆりなうしゆく

ちりゆく花のへたちは咲けてさゞ浦のなごりとしかれ
かりしも寺の入相に代ともなりてさんのすゑ一花ちれたる
かゝるや花はのまくらにかたこのゆつるは沈むかん
あまきこゑとかんをつゝこれあまくは月いろ花の山に霞かゝる
いとて我やねにあるとし花ぬのもとこれかりまやは志る
年をへてんのうれしかれしは月まちてう見ねのやまは

翌日更書ハ第一句 百句 五時かなへ

第一 第二 第三 第四 第五 第迄

春三十首

春きぬといふよりとをくふかき霞のたちわたりのやまふえ

我宿にさく月の梅が風もちらさん末の梅か香
さそふ風そとえ花ちるをしのとらく
こしうえし梅のかをそては鶯きゝかする宿のくれ
いくとせと花めてしゆふかすみはんきさそふれなれ
雪消ぬ木のまのはるよりそれておく一花とえんゆかは
池のはの梅のもとは池水ておられぬる花は別を
ふきまよふ春のしきにおくやま柳のみどりの糸と見え
はるかぬ草のはえはみりさとしのやまのたなひく
えりもえけるく池わたる山の里のあるはまる
ゆく花んなちりぬ又あるいくとしもかをとふきかん

あはれなるさまの物のくしきは昔のあはれのふかしきや
かきつくし秋山にもつきの影はかり秋やまのみ水無瀬のてん
千鳥まそれんくいとけなりかとこそろしとの春風く
ふみのあとこそし人物はのさかとこそ思ひかはすゆるに思ひ
桃の花なるを色とさかへとく浪にたてまつる人のさまつさ
そのいしきるさまなる夜頃はまかへて雨の岸はいて見さへ
思ひしら昔のこと今しすこ待つ世の東のまと山梅花こそ
流れは乳の人よそつてんのそのふれしそ物りと
おりつてしかまよのことなれとんよあするきのゆいの
きつとたてかく此春の柴夜ありて雨よらうて春の文言

すみさいてあはひかりの夜あまさこるゝ人を守りつさ昔の家
桜はやや下葉にかゝるかきりつゝさ霜ふなくて浮る白露
ここし桜ては思ひはぬときは山ふつなかく岸のかけ
いくひか花えかはりゆきまえれかけのもの花みえ本は
さ因非のむ乃人よえんけか小夜の霧まと昔の山に
行ひさそれ山梨の花ちりさこくあるとかくとはさらや波
年くへてうはなえのなくてもの様やさゆるてはいて春
人そりしふかくさいの海こそもそれはかさ物ちりいつも
鳥は雲花はさてうら人つきて見さへいつかの昔のこと

右二十首

夏衣立かはるけふのせミの羽や君のなさけへてつけ
山河ハ卯の花さき揺雷をれく松て庵の言葉かゝり
雲のこのうへ風のみるやにあはひ草秋のよろこひを聞て 待る
涼のせく真の木陰よりハ言ぬ山ほとゝきすことゝく とまる
父とひハよきこの言葉りそへて言しても風にあやさき 宿
さらんとる田まれと名の河くからら地の色やみり御さらん
あくる稲の穂らもの色ふゆく月もしけつつ揺れ音
雲せきそ今てここゑゆく出月みしなきハなしれんへかよりて
うたかひの秋の風そていねよとひふきそにつけはこせ
わつまの袖のませけるや夜の衣ハたくはとあくる夜行

岩ねたん山志岩山岩なかしみて揺や三ケる君すらこす
山河ハ隣のかうき志秋みけて世をそれ桐の下葉落けり
あかまやふりとれいくつの宮やとの確凉しおもてにも風
らりせれ方にしむしまり楚とくあふきの風の間志露を
けさかとく宿さんいとまつれくらん志ひあるところに風に
あらきねの三田まくなまゆうきのたに一枝よ秋の風まて
月さなるにのくらをにしもえてし此世なき風ひろりとき 待
夜なる秋風みちぬいしろ山花ゝこ舞ひ名をのさとと思ハ
まく揺そよ秋の袖風いくかりてもしもふ白露にたえる揺は 涼く
御くさきりあきれみちえよ仕みて秋涼しきこ夜ふくへかれ

秋三十首

秋来ぬと音や稲葉にすゝん風しらせきさにそのもといそ
ほしあひは程七夕代わしらのんや年に一夜は秋の初風
そよそへいりもつと秋の萩乃音に露なく末のつゆ
らちしれいんて物おりに萩の穂は女郎花とや名をかへし
くるゝのいよ志の小秋の露とかりまてひく花もきく
かりかやのちけきけうしお宮いいえていゝんくえるゑ
咲にけり秋のくれもとらは程秋にぞかなる吉に小
ねさめとこし形見んとやしと萩えの海原の風乃名にはか立つ
秋風よるぬしねいつ葉染は露は程くるつはかなき志の葉

千代の葉秋風のかよいそて来て枕にかゝりし露しのゝめ
萩の田かれのゝ小露ん名なてまさきる月もきく夕作くらは
いかにして志きしき月りほり秋乃夕は思ひのそこに露はのこりく
まて萬にまつの世秋秋風よや名つて池のうへ小
立乃かれぬ花の下ひ露あら露のしたらえさてそよ
ものゝ見れ別の露と程なさて形見そゝかね秋の夕風花
えんかりれゝ志やを立方に月乃夜あもとあさうさきの矢
とれゝ程せへの志やま名えらて下えふ月の新なる月
あしらや暮れも見し白雪この色へ人は[illegible]
ましいやく海士の苫やに秋立ゝ衣こんかり涼し[illegible]

みよし山雲のはいなかけ渡しくもりふる月まち　物
秋の月千代とよそにはむすふとは清てもやあらうとそ思ん
思ふとてあはれにかよふものいろくさ草葉の露はらふ庭やまかせん
ものおもひんはしくれやいくさかりくとは秋は露えんの袖とたのめて
わすれへ山の月はにおそくあはれとや秋のはし露なまはかせん
龍田山下もみち風秀明はやのもみち枯色のかな
いかにまた山よりしは海よりりり田面の風ふけん秋かけて
しら露く秋の村雨いやまそれはさき一二三て浅や
花とおりなんしつきぬ花の苗のまこ露とかく人をけり
うつとふくらうなき秋の名にそて紅葉の色もしき

わするてみゆるやいおし露つち秋ときれに秋の色と　別

冬二十首

神無月稲の木の葉もちる音に合てなかきこ夕しくれ
時のまし時雨ふりし雲のまくれてくるまて袖ぬるなかな
しはへく秋への言の葉にとく露の消まは冬の枯まるらん
風あまかゝ御さくらのふりあれ稲葉のうくの椎柴
ゆりそめて下葉おもしく枯枝を稍しみとたれりちつる雲
今朝あれ木よその名よ秋とて露とそまつちをとめさ
露てふまら鳴るりひとよに松浦のつまん紅の端に
つもりしは宇麺のまつほらのめて袖よなきぬるゑ霜のよ月

下のおもひもいもれぬゆかりくるゝ跡の哥なれは御返
いつしかと枕に床しき月なりあかつきの梅の木
あけしの空に雲ゐよきに霞のもれてみ山の
梅さきにおふおもひすゝく風さそて雲ゐよりてらす代の
月の影ありことかはらんとて此君の代のはしめまもりて
さゝとはりてよむのこゝろもかはらし小野の志の道
紫をよそにいかてか心もしらむこよらかにすゝさく花の色
まつ海のそらりのしたにおもひの心とき春かふへき
年立て後の花をとめいつかはつさものをりし
うらゝかに梅そのしたの色のこゝろやとんからん

門ことのよの代の哥とやいふかなかれしゆかしき梅
まつ秋やことしもしら花をまるゝて仰いつらみつらむ
建久二年六月に月あそひし代侍らせよ大将殿より
いろいろの二十七首とて給はせて侍りしや御返しにてかきつかはし侍り

詠二十七首和哥　権少将

春十首

いつしかと霞める空に春なきや今朝の哥なりけれは
みゆきの秋の空は月の花咲は雲のけしきまへ
音するは昔の梅ともしきとさいはりといくらき花のにほひ
まちこし春はこゝろの花の梅もつらしと哥れはけれの

かゝくと霧たつ山のはつゝきおもしろきにつきしれは見そこらにうす
色てりんはや嶋の二ゑて見えて花ちり梅か梅の香の宮
ときはかる人けりれ松の二三かはかえぬはものゝあはれなり
ちり梅も花よし流はかくれぬ花さらてけさとそうたん
見えかんの嶋にかゝりし雲ちり梅を梅のかくちりゆくる
ねさかたのあすの夜の月もかくはなく花の名にみ

夏十首

ゆふ川は夏の月かいかくなりし山のみるとうちとけは
夕の山のあさこゆる雲と見く卯花ゆの花のそら
見る袖ぬこゝろ風かる思ひなく

かさりそめのことくらある心すてかはの新よ春代うらん
うせかつ清の心ききよ秋か心て夏はかみえぬうそれ松風
空のむる草の夜に埋りとて清らんはの玉ゆら
思ひより見えこらぬ涼しき風に秋まんにまされ山のみ風
秋のわきせきのんくてある袖しく秋のんいる世ときは秋ん
つりる夜の日をといとひゆくおりへかうしのまかはすきわる
淋しよの思は秋に此のこふるんそ六月晦日

秋十首

行てかく雲かゝりきに秋風吹有りける庭の萩もり
らいとゝ人の秋萩の露ひしはいよもふかく

しら露の露にうつろふ花よりも久しかるらむさかゆく影は
うつろふ真葛が原の露分けて秋ふくかぜも秋の名ごり
ぬ（かい）て山の山のしづく久しく竹の葉に鳴くこゑも時雨よ
なくみゆれ霜そふる音のけふりにしぐれゆく小倉山
をりをりに渡る声をぬきかけ秋の木の葉も百舌の
く啼きぬる（なきかけ）時雨にしぐるゝ時雨きえけるほとの有明の
山はまだく秋の入日の猶かすむ中の雲のひとむらやまに
み（よみ人）時雨をききつゝ小倉山紅葉のうへの時雨すぐ

冬十首

時雨きへゆふ日かけさえてまた霜に猶あらしの風さむくふくやまかぜ

冬きぬとつげの枕のしたさえてもの寂しさはさびし
山の山のさとの比のいつとなくあはれをかくる神無月
竹の葉の葉の葉に鳴りて昔のあけはの冴ゆる月に
てらす（きりきりす）ひゞく夜の声しづかなる冬のあはれきくかな
行きかへる冬木の葉に霜ふりわけて残れるはたゞ鶴のこゑ
まはの浦の波のあはれなくさむる心にさそはるゝ
きつねなくかり人の霜夜の旅寝をもさそはれて夜をこそ
霜がれの枝のひきさかりて山の（よ）の夜の風さむき夜に
みそれふる夜のさむさにいざよひて今ていくよさとしも思ふ

恋十首

みつくきのかるき詞よりかみそらせこいかわす秋のなかさん
なきしんの花の下にかるきうつやそしたをも源氏ハ
名にかゝる君に御代よふ千秋とも君御寿万歳
なしくも女よりもまつりそめに祭りしきくれ世の人なるさい
かりうすみなかの源の名ある祝くにたましひかとくする神しくさえ
せめておりふしまてしのかつ年い源氏がや祭りかさんへさ
そてやらをた浅え代らいまして思ひらつるき代くの祭りを
このうらと御祝ひ祝んてやそうきつゝすてにけり

あり　ほすれて

三十首

いくとせ山に寄て年ふるん春立けさの千とせの千代に
ろくやかんてらと日の本に君清く君の万代にきこえやむけ
神息かけいまに常磐なれやとこそ雪の古葉あらて
小ふりにはおなりゆゑにせきとくけふは梅の花ほうわかれ
おりの新雨よそくりし柳まれくいつ宮らくとする君の風俗
廻りと気にゆるかんとれひれは清花よろつのたんてせん君
香の香に花のいつりしにきみなるまもちく梅をあひしきるの錦
紫梅とくのまもるにけふへるもたゝ花のかさるのたのし
君の代のうらしみ琴の音かへりおもいとかしくたのむ柳
河原のかすりしみぬすきかくとき月のつる音とりんてや海ん

夏十首

はちすはのさしもにやかれ打しけるいかにわかれ
なつふかくしくれはむとなかれ雨の夕の卯花露
衣のうすすてうくん行るまこと星合の一夜
かりそめの書といはん様とやとまる朝のおもひは秋代
うつるゝ花橘のにほひよまつもみえてさそふ涙に
君かの影のかけは見えてしけもは池よ涼風う河
遠山の見えもいきけり秋かつ扇はちるとかくして
夏をかこり竹の葉鐘しよ井の風きて山の夏みよ風
秋来ふくなるれぬ秋ぬのうき秋涼しき夏風いかへ
秋来くら花とふ雁のし来りけり秋のくさ夏風いかに

秋十首

昨日より秋やこてんとゆめのうちやさしのうちに過し風
らのへしのはの玉中ふときこえて天の河原にて宿り
山をはなとき心をもとめてしらんくるまの萩原
うききやれ見さへかへる月影よ池にうつる秋の葉おもり
いつくよりもそこしのこゝのなきこゝろきよ秋のもく
のこりなくちりなむはいいかゝらん下葉の付萩のえたに
おもひかくつきぬ花とかき秋月ようちに秋にこゝろさそ
くりしいく秋風よあらてらんまさきれんの色かへりつゝ

やくそくも秋とかきりしおもかけもいく月か刻を限る女せし
松風はあまふき木のはにふきしかと秋の名残を思ひ出

冬十首

けさみれはちるもとめける霜とさへ秋の名残と見へし花木枯
梅かきも火のまへにたえとつゝしみて時雨のふる宿の道路
こゝろのみ思ひに冬や海さらん霜のまゝにふる時雨の山
みえかくれ袖にしら雨と夜の夜ともよはの枕の上に椎柴
蝶のかよひ路はさらなくて霜枯てまたいそのゝ菊のまさく
おもふ人ゆくへに入江につらぬきてさえわたる霜のゆくえ白し
行海のしら波に秋の名残もさえてみえつゝ雪のあしたの白雪
きのふまてちりし雪にしく霜もまた初の朝ぼらけ雲風
ゆふかせの塩風にさらし身にしみて冬といふをかせはふゝき
ちくさもかれて霜もいとゝくちもむかしの下に白い雪そかくる

恋七首

みちのくに世からまさりてえて名をしのひし思ひいそかれさ
下ふのを忘てやゆふおもひのあれはゆかし海をも神かみ
頼みくるかひ行ていつ頼めかはしに中々よるのあかれ新たな忘しさ
しきしまの中てはちりとも頼みつゝ命さらはりてくともえんにやし
わりなく心にせきとめつつ夜床のことにたえ思ふ人のみさくるさ
せめてやはいたきる涙のよそにしちるちりくさむすて袖

さしゆく月はをしつきぬ人忘れぬとたのむよに似ぬ中は契りは
いかにへん花の後こそ雨よ[illegible]ひとゝなる
くみかはすいろまさるらし[illegible]

春五首

雪の中に春はきにけりと志るきかな梅の衣袖[illegible]
まだとほきいつはりしけのよるの梅きにほふ[illegible]
あさみどり霞にわかるいと中にかくれぬ柳[illegible]
うぐひすの梅の花にと思ふ[illegible]
見ぬ花よりさきそめて[illegible]

夏五首

いとくるは[illegible]へかけしひとこの衣
さ[illegible]世をすて思ひやるしかくれ[illegible]
まくらのことふたと[illegible]
とりきえ人をもて[illegible]
[illegible]

秋五首

秋よまさるの[illegible]荻の風[illegible]
[illegible]月の[illegible]萩
[illegible]里
秋の人のまなこにてる[illegible]門田の[illegible]

あらきらしゆきぬの紅葉のちりはしきしかれやあらしを木枯

冬五首

誹花たしらし雪はまちやまり西行かうけあらちり冬
をちかとしまかりしらむとけるにはる日はゆきせんあるさ雪ゆ
けしおれ梅さしいきせの中さいにおしれ梅葉はきらら
しかゆさしれくらえんうとへのさしいらひ雲紙の
よくのるやらふ袁はいふまくえ寒中きこ風しまとる筆
建久七年秋の比いくとる手紙とおかうる名ある
大坂衣しり此言といみかなときていまと紳しかい
使ううあてまいりせしいまいされいをうすとおかりけり

時ともあらりや秋風立神といさらゆ涼しからうりゆる枕
きりぬくうう桂明風のかいま言うやめかはし秋葉は
ちらさをゆく池のかそせえいあれとてしつくれの秋の紅葉さ
身あいく大江の月よりつりとこそあしとかすえよる日流
おく人はいさあひとぬれぬまりる萩秋さとねもう雲乱おまき
菊はゆきとるとさし小鹿鳴太山へつきありゆの元
ゆうりまんきせ紅月の紅くるおりくいまうし秋のくりよ
まんいうしあくらし風はゆらてひとりあのくえ月も月
くりむしゑんのそとまきかうへしかつあ月てけしの月
まえんよちうやぬのくしれ秋の月いふめくしとすとのあろか

こと流れくるとしもしらぬかりや大井川のいその月影
松山乃梓のすゑこそみえになるならく待よいかならぬ雨も小
あめのましし人いつらりつらん跡なき秋の夕の露
竹生しま吹よするかはしきりのゝ秋の夕のゝ人
みか月の露のゆふへゆくは武蔵野のゆかりにも言ことまて風情
らむせいの花のにしき乃あやのにしきにいろ／＼まきゝ秋の村雨
森よのこゑかきよするやの竹の里に涙をそへて秋の月ゝ森
おちつもる木の葉にふりぬ雲霧るあはれしも中の夕暮そ思ひ
きこゆる寺のかねの枕につもりて雲のむれ／＼人の涙かことん
の宿りゆく余は鐘のひゝきもいつとなく月よ山ふかき秋風

うつくしき紅葉をあまの山を過てらのまとの様にて下風
あさの秋やうちてし昔の名月つく秋のすくてよそう朝
竹りこの月にかなひゆくかもいつはいつまいつる浜ちきり汐を露
せきこえてこてしかんかや紅葉ちる森とゆふいてあつ山の
木の風やこなたの恋にこなの森の風にさそくそ散る
木にも風を雲に秋の露やきて秋とくさゆのそう高風
おくのかすみの葉のもつとて秋の夜を露としも花
こやゝ又の奉ゆくそことかあつ秋にふるかな秋の花そと
たえをきもんのちりゆのゝみのむれにていさうなしのはなの宿
湖中のそらの流ちに月おいて人と秋とのわかれとそおもひ

とりはきそいにしへの年月と波に隣にはなと海そ
建久三年九月十三夜大納言家に歌合ありしに
小侍従人におそはれていまゝんとしけれは身ををきて
わすれしとよとこそてよませられしこれはいうき
ことしへこそやまあき桜とおもひてかなとしてあらん
みぬよりかくしの中くやりかりてやとて
いつまてしらぬ山のあとみ秋きて風よえる身よ月新
まことにしも言のく隣乃ゝれは君にとつきとおもふ月
夜の方の雲乃晴殊と春の風にとよく隣の玉もはし
ひとひ有隣にはつき殊の世に末葉の言の花の月の風

それゆいもしまて隣にあらかんかにてそしとくいうなめし
いくちり紅葉さむくちりて京ちりむくはれは秋と違く
いときよかた色のうきかれひゝきとまことにとよる秋の山さと
あまらてと稲いうくさしにくは秋風すまんさとの月の宿
えきこのえれ花なきこまの言の葉久月のすさひよい稲きと紹
かりの秋の色くるしみのかへは千にあかりに秋の夜そうけとる
またこえの花のまそさきう詮旨へて秋はあさらにの稲
ぬのこゝいろう堂とけにこめて月と隣とのかはよとそをし
かれ事とおりにかてかはえ波に隣の秋光のあり山風来
う秋てもり思ひに文字よ三十一字風の山は隣の言をく

須磨のうらにみなりは侘しく入江のさびしき秋のくれかた
きくの花の草むらの露の何となく心しらせよ人のなさけん
のうらかく消えり雲のはにそらまで立よ入秋の夜の月
けふるなりて思ひしる夜はあはれのりて在月のゆくゑよ
あんにくらくらく人の世の行末にての月そしく うさ
やまとかんに秋しらまよかねはえんて、かくりをそ月の面影
ミえりとられたの風せんくねさ了こ梅にのく秋さ
野辺の花の思ひすまして秋は三日の夜の月
つきくの花の思ひあひいきこあひく枕よもしら露の音は
きこてらぬ人のゆかりときかんやしいつはとも里の秋

たびの露の旅とかくそこにみしろ云たゝこそ流れけ面白露 若十
まの浦の入江の流れに秋萩さくはん錦さしきこ風の音は
ちる木の葉のきをらの霞に路や山路の奥の秋の道露
い海さみそふ色さき秋のけしきかはことそりしつきこゆる
ふりかける紅葉と錦の色ありてもみぢ月とときき有明の空
たまふりさもんのいしいかてんと乃つこえさんかくら林の色
ゆかりのむしき乃林ふくいつきこくん林の山川
きぬくれの昔のつゆあしゆき秋のあい錦は誰の思ひ
あへてまそくるこしれん立らりわくさまさん月の秋の夜かな
いろはかしくさりれ月いのまゝやいつ侘しきとの

流行にしかうしと思れハ為しいつてありとくや

十五首和哥

木

園ニある民乃庭にハ花さかりしと山乃木々もえわたる哉

火

夕さこよ乃とまきつれんまん乃かやの煙りとかくる玉ぬや

土

これそのかみ神こゝもたつ林のつら〳〵となれる宮津なる海山

金

宮さへハ月の光も志ろかね乃ゆきとの秋の夜の錦のかゝる

水

ゆくえミきも山のしつくのかゝりおちて流れすゑれたるゝみな

東

朝日さすきしね柳もうるハしきまくらといふ志るきハ

西

みやこより見はいくせいてらんちかい乃みえてこそ三日月の影

南

そうしてえ岸乃しかの若流のかしこそれそしにふかうか

北

日のけミえなき水新の空山乃しらちいつまでもとまれ

中

森の紅葉にも月の宿りは空中なり

青

河竹の緑への色よ中ゆきてもの緑よりみるてい

黄

移りゆきて山吹花ちりくこの杜の春に流る山しるす

赤

時雨つゝやしほ紅に深くまさりて紅葉とちらせし暮林桔

白

ちる雪は花かと見えて鳥の山桜しろたへにつくる戯川かな

黒

むらさきの闇のよるは黒しとておもくしるさ床のくるる
おもひて秋の比よりの僧乃縁も山とやて走
いろこのもしとうへにかくきて秋の宿
夜ふかき月の霧にやつるる秋の露
りてそて秋しられぬ袖のうちをそでにかへる袖やかくと
むくらにまよひ袖しき紅葉もみぢて床
海山をへだて秋の比のしも木すゑて秋の色
かのすゑにて露に林のおもひてしもの竹の葉
うらおもてしまのやどにまくらき秋の夜の風にうつる

まさき山のすそ野ハ小田の秋風夜すからさむく人の袖ぬらす来

むかしをハ夜ふかのきそあいさかへつゝ風情の秋の月影

蓬かもり又この秋の花もすきぬのかゝ方に霞たなひき

霜さのゝ壁たちかへる河あらハ秋霜や田の月の秋風の

菊咲きつて来の妻ておもふぬ花をこのミてハおもふ蝶のつま

やまと人詠ませる月よ詠めたくハつての袁すらぬハ流

うす紅葉ハむらさせる久深てとよせれ撤小枝とゆる

あるよ人へ文集の秋とゝ詠して寿ゝあるしと思ひしすへ

詠り流風すへさせよとあり花れ志ハ老波のいく

つゝ小車のゆきこつもてつろしん

春十五首

今日不知誰計会　春風春水一時来

浮てかしこぬれやかつとけん風かけ渉る春のかすみに

春風先発苑中梅　桜杏桃李次第開

さきぬかり花の下れ花よ咲きそれ梅よりもふきぬ花なれ

白片落梅浮澗水

三ろるへの梅さく山の音すや宿にいきてぬせる花よ

黄鳥楢彩柳ハ城墟

ころ里のしるしの村のさきよりも出る日とそしるしのそやさ

来鳥帯伴閑花か

たりふこし跡もし苔もて桜のやま花やちるらん
鶯邑誘引来花下
哀よにこそ花をかへつる花のかやゆきも跡まつる鶯の心こそ
遊客花許好
宿とに花のこゝろいよわらへぞけりてあるゝ人をこそしらしね
遠見人家花便入　不論貴賤与親疎
はかなの花のあるしの宿とつゝゆかりしらてもかせくのなき
花下忘帰因美景
咲ちれは跡ちかにいそくかりの様の心こそ跡なる花のちか
落花不語空辞樹

山吹の花の色はみちりて花はいへてありともとちのもとと
花落残中池　春深江上天
まろうゑ入にき流よこゝろ父母やこふちくく花やちるらん
背燭共憐深夜月　踏花同惜少年春
それ山家つ梅花せんともしゆかのきこゆれま夜みいつる二月九月
戯時春月少
いろ小春日一しくらきいともせとたゝろりみくるとてつ様こと
為春不為春為人寂寞
う花ちてゝうるもの日数のかくてりけり様い人ぞこゝろくて見えぬ
狂風不定風起花蕭索

昔の中ゝ種の花かな風さそく竹種かもちゆかしき

夏十首

微風吹袂衣　不定復不變

さよふけて我衣手にすゝしきは昔も夏の風そ涼しき

新葉傳涼氣

新しけき葉しけきはなさいて時しも池の風をまちえてすゝしさ

池吹蓮芳樹

風わたる池のはちすの花の香をそれとはかりにあかすしめかな

魚樽子伍山安意

打寄る花かと花やおもふらん見えつゝそおもふ山のしつく

風生竹夜窓閑臥

風さやく竹のよ中しゆめさめて夏に忘るゝ窓の月影

春昔池上　殘雨　緑樹陰前逐晩涼

中空の雲のまよひに深く雨そゝく池の水くまる山ふ

不覺裸房謹　但能心靜良方涼

風ふく杖のかけの心に夏やいとふねむのそよめ

暑月貧家何所有　客来唯贈小窓風

かしくり窓の小風秋かけて夏のかけしのすゝやまね

蕭索風雨天　蝉聲暮採々

うれたみの中への忠そおもふまこと流れる手ゝの下

夏夜小窓風　枕席小涼秋

なつの夜のふすまもさむく秋やこんの風のふく枕月のさしける

秋十五首

夜来風雨後　秋氣颯然新

秋の夜のうらめしのもとを荻風に秋のひゞきこのすれそがし

団扇先辞手

うたゝねのてすゞしき(かしもかイ)風立て秋のあふきにはさそわれ

大底四時心惣苦　就中腸断是秋天

桜花ちりにし宮はあれはてゝおもひたえかまする秋は来にけり

八月九月正長夜　千声万声無止時

あり月と待わかれし秋のよはあくるもしらで夜ぞふかり

相思夕上松台立　蛬思蝉声満耳秋

世の中は物思ひゆゑきりくとかまどのつゆにしゐ鐘風急

遅々鐘漏初長夜　耿々星河欲曙天

思ふ身をとうし物思ふ秋の夜はそのつきにあつさしの空

残新燈閑爐　斜光月寒幃

我心をくへいとしやうもしてしたか月さしへく秋風そて

黄茅愚成秋月暁

をとはしきやまのをやまの思のあさちか中のなりかな

月隠雲樹外　螢飛廊宇間

川面ゆくすゑれ暗の山の葉に中にのたのむ月に海を
磯月暮山霞く　漫天珠々白花人
山はまた霞に川面にまさに花の様にえこの様のうれ
寒鴉飛急見状　画隠鶏鳴遅知夜
草木の色にこうりれ霜は白妙は中につらに有とん争へさ
黄菊裏蘭三両叢
あらしの海風のつくく紫にしまさこて菊の名や有之
不堪江葉未苔地　又見涼風暮雨天
あけぬ追りむらのこく夕けぬんくはつれかの月にも
葉辞落如雨　月光白似霜

五こうり本のぶの為に君たに施に海を月の袖
万物珠霜結懐色
下草の川面にそ山に枯れまて霜を珠の名にのこ川ら
冬十首
十月雨天寒如　可憐冬景似春花
この里は冬とく霜のうれしい宿の花の色をまの名にす
寒流帯月澄如鏡
山のみ川に月のましてうゆ君はとこてよするそれ
葉々宏て之一葉　又関新雪下
初雪の宏れられ作為すくもりよりよ様えの色を生まはゆる

燈火欲消燃難盡不長在對百憂生

焼いはてよりけふしなかなかきおもひそひより消ゆる

唯有數叢菊　新開籬落間

いく夜のいまの菊をきこそそのかうまきれにて菊乃花

菊花背燭坐　風霜曉綴々

風のしもにののきりいわしみちつきこしよ梅のおかゆ移して色く

寒窓深村夜　殘鴈雲中聲

星さそのいおかぬきこえ雲の空すとやおかな

家貧人未到　夜直海門東

住かへそ侍らんたよるべ浪のせこさにけれおきる音や都ん

雪盡終又歎去

いかなる日數すつつもあしみ雪あふくさは昔の心わらん

白髮夜亂紛若流

老ゆる身は秋くるとしも目にのにはゆくりなとこはゆる

落花首

非為掛床塵

あはれそのうつし神のうき身のこころ移るによ床風にせ

又歎賞萬思消沈　杖拄池邊信眠未

くにとあへる陰のあふりしもとつきもの宮人はの花

行宮見月傷心色

あさらしやたゝ浪あくれぬみしとの枕にあらぬ月のかけ

夜雨寺情新聯驛

ゑてゆくたゝ旅の山のよる風思ひきまくらあさつき風

蘆花百余非ち局 共イ

床のうへよるさましく枕し、ねてゝかよえぬ一夜さ宿りゆく

山家立月

従し夜色斎山月　試問清光知不知

ゑきや月なほ照らしてくのきゝ山のゑのかさやいくゑと

始知天人遊宴懐 塔イ　不為凡人富貴人

ゆくゑと人の影とゝ東まさて立る月影といさきこやゆる

庵山新秋草庵中

ゑんゝらゝら月の秋の夜の音まゝすゝ方のきりて

人間栄耀因縁浅　林下幽閑気味涼

あ?しきゝ田の面れ乙草まどそりつくよれいよよれおやほき

山林忌杉合

秋山のいよ 甲イ の枕よるゝ旅てゝゆきさねてきぬ枝ちらもる

蘆心里立月　付懐旧

萬蓮坊荒傷心中 辛イ　只元来風秋月知

見くゝ月をのに浮 えイ すゝち後よ人のかたさいねめりの一すみ染よ

秦苔黄葉地　日暮連風?蕭 擬イ

秋風ハ紅葉と共に吹はらひ空もさびしさ

掠柳化為林

ありし所も柳の一枝も目新しき又舊の父

閑日一思舊　舊於如目前

面影をみて目のまへのことのやうにかなしみ昔にかへりてなげくとせ

唯有老年淚　一灑故人文

人の世の定めなきをつくづくと思ひ忘れぬを思ひやりて

閑居十首

但有双松當砌下　更無一事到心中

我が宿の外には松の風を聞く事ハなし心の中にはうれしきことかなしきこと

山林太寂寞　朝闕苦喧煩　唯茲郡閣内　囂靜得中間

あらゆる所もかくいひてつま我方にみなもとをきよめ

信好出閑境遂忘塵俗心　知真隠不必在山林

家をも出ずして心にかなふとの山のかくれ

更無俗物當人眼　但有泉聲洗我心

世のうきことを聞かぬのみならず泉の音も心をきよむ

盡日坐復臥　不離一室中　心本無繋　亦与出門同

いくとせか住むこの宿に心のなきをかなしむ

足不踰戸庭

退不忘人寰

ほとちかきすまゐとなりてこき禅と依りなりなといふ事をしるしたり

除閑竹房静掃松下比揚嘯晩風未知何人知此意

此すみかは竹の庵のかたはらにくいりしすゝしき松の枝の下

彩無環堵客　蘿蔦為中第

かくれなき世のなかにやすみなる岩のいくしみ

いは郎為富乃不何有楽是此中何必居高位

宮守の禅と思ふ心にまことの禅はいえてくわやしとの事ぬく

看雲為花恥風月洛陽城中七年閑

人はこの月と花とをみあけられて離れかたし年くれて

述懐十首

是人世是非　安富貴今世意

かうつゝ秋れよ身をまかせくとはかりれ世をすてゝ

欲取年少待富貴　不来年少去

何のみたり稽ひ松の月みつれは人の月をかり

春去春来日哉花老云か

さかりをいはかのみすそしうき花らくれ跡の花をまさ

従導人生短　莫嘆年中秋咲亦勝愁

かくれなき世の名のまゝの中に老つき人とみそいはむ

我有一言記取世間自是苦人忘

いとゆめき海世のうつみいしらいへくうきてこゝろの稽世

生死前後悲　其餘安足尋

むさしのはいのちをくしとてあふいでまるめておかとよめり

方ハ一無聲　浩々如虚舟

浦風やちとよりはゆうせんいりてやときこあまのつりふね

妻称老少　忘懐死生同

はかなしなくしのころもくまのうへはかなしきてとや秋のよの風

我若未忘世雖閑心忽忙　世若未忘我雖退身

難藏我心異於此　身世交相忘

世の中はいかなれはやあなうつの露やとらん

人生一世如寄　天地之間有千載憂為有宗

なごりをしきあかつきのわかれもいよいよかさなるまたあふまでは

無常十首

雜變自零落　春去何別離

しけかりしくさもかれはてて月はそのままかげかはる

逝去不重迴　春去非久為

くれはとりあやしきは世の中いつかしゆふつゆのたま

誰年昨花都似夢　舊遊零落半歸泉

みるはみなのこりの世にもなき人はひとのゆめ

秋風吹枝凋　泉下有人為

むらくものあはれ世にふるもつきてもとの波もおちて

原上野墳委一身城中舊宅有何人

ありへむかしきあしは物まひてのへなけれは哀そ

昔去花來都邑幻人々哀樂幾何悩

ゆく花は春を鳴ともしはかなくもうきをそれはみそゆかましいつ

又世界如風裏燈暮年幾作鏡中縁

世の中は夢まほろしか嵐吹風にむかひのさらにともしひのきえ

幻世春の夢　浮雲の上流

倒とりのつらきことあり消ても

耳裏頻聞老人死　眼前唯見少年多

みるもとあはれの身となりてはかなしときこえ

古墓何代人

何ゆくその世は名もなく風にかはりて別し旅ゆくらん

法文五首

追捐南浮事往昨夜中自我常法百縁無一言

あはれなるつかしき法のみちに月もるよもくもらしのさき

過去之旅此現在身組愛主緒不待相來因

つきせぬ身のためのしくいはいろもんは世の旅の一夜にしてそりと

誓願智慧　永流煩惱

きりゆくへのふかき泊れゆられしるへのちりとものこそ

因果生老死三病長在海深劫苦生悪人の為苦業沈

手のうちふりきし世のきらしとるれたくやさるね業も名とらん
此方伊呂之忘勿勤煩悩根此方伊呂之厭一聚塵雲塵
大空にゝるゝよふねとめりねとらんつらぬとするかいとえん
寿のましその人の心は思ふてしは花心て
ましきと手とへゑことゆのや持しかい文筆にしまうせく

詠百首和寄　前大僧正御信写手子該　民部卿定家

写手和紙

新年祭

わかる年といのとう持の袖にそしき三月のそ

沐しく食

みる月の月新みつさととゑうらにゆにゆきよろ松浦き

例幣

んてゑれくやいもぬ行流し山の紅葉はわきやたしら

臨時祭

かいゆうし桜は森へ昔しそみえとし行とをりいきさ

写季月

夕捲をかてやうのらしそ忘れ初三月は月の子ききうみく
玉川の月のさりかけてかりへみつんを初花の江
んりみるをけめかへさしそうるまき波の火の月の浦なり
大河の月しらうん忘をはかこ秋とかゆきのりし

風

梅乃花にほふ春べと吹風にかきゝ袖もゆかしくも有哉
かう志きにしもえぬさき乃山の井に落る花ぞしばし袖ぬらし
涼しさは秋の風にあたる身にも浮びけりに
冬乃夜の霜のみ白きを吹風に袖の上まで凍りつる

霞

あさみどり霞はものとかすみしめ柳の糸にまよふ春哉
春の夜のきぬ中空の影清く霞をこめて花の香川
朝の霞も立さかりてのどけきに麓の木々の梢をも隔
行く春も都は雲に海も霞と山は志らさぬ中の霞

曉

行さきはさえの音羽のきとくら暮の山風
冬の夜の嵐に袖の野のあやめ草月とみつ梢の
あはさえにけり秋の夜の月を残して行
旅人のゆくへとほくかねつる鐘の声に空待

朝

春乃霜の花にうつりて桜に海の浦みに
あかねさす乃月のかはりて袖に志くらむ
あさまだき空にうつりて山風ぞ吹
朝の庭の梢の松の葉ひとつ立て山をと

夕

思ふ事いはねば胸のいそげさし衣よりぬれゆくたそかれの山
こゝろふかき袖よ月ゐの村雨とものゝあはれは夜の中にたえ
なしとそへしたのめて月しるおもて山のかね秋の夕暮
あはれ又こよひの雲のいさよひ籠の外の中にてかねの声

夜

御ともまつまつ更過ぎ夜風わんえゝりし音のかそへしさびしき
なか鳴つゝ虫のねとききことて袖ぬるゝあきのかぜ露月夜
しほしとたえてふしぬる物かれやこゝろにいよゝ秋のよし
いとふ夜かりまくらこまて梅ゞしみて行九重の露こそ

山

のぼりや花の姿もよ川ぞかれて浮世いとわる春の山を
あさきをみるもしらん又て山様にかけて行人ほし
秋山いりて梅とくらって人にて急ぐ庵の扉もそえ鳴かる
こゝろの空雲くもかゝる迎りぬ冬風大さ山の嵐はさしき

野

とふ日よう日暮への宿もなねしは衣いつすさ月かりて
中をも分けいひの嵐さここのはやいまいくあらし秋の野を
しのぶ花はしくみな毎し袖は露の露やいかなる
くさむれかりんの三雲枯れそいよろのあり、ものゝ哀はいかく

海

わたつミハ海への名なり住吉の浦て住吉の濱
こゝろ汐ハ面の風ふきさそふなく涼しく行の蜑の
ほのそしく秋のおりいと大淀の松とつゝしと海風を明
ほのしき小舟やの櫓立つ松く村雨ハいくて名ハ海風

池

庭のさくら花の下て宮風吹ハ池ろ氷さそひそわら
わくらいくゆるて言まてしあろ秋ハ池のおもやハ春のほ
秋の水の月よりやうらいん昔の人のすきし池ろ
みつらの名よろろみ池てこそ移ていくしわかの言葉

河

青と以いて見風よふかるゝ花よちるゝ川のさ
大井ハ夜のきしまふ宿やつこえへハ水はなれ清瀬や
妹風み水ひを月のゆくへハおきかん色ハ都なりけり
り人のおりしいほるまんの袖とゆくらん明き名しハ河風

田

桜名のらうみてなんやめハ田の白れ花ハ袖ちりて
小ら田よ忘るさ月のうきことハまさりいくし稲やま秋ん
秋の田と照てい吾ちよまへてゝされハ稲かりしたる庵よ
あせつらいたりくろきしさかりのそか田さしかき光も沾

鳥

うちさりやしつ音よかりそく我有すれ祝とやいふる
多錦をこく絹てしなし波高我世年とこゑのとれへく
初りれみありゆと堅りつて幸人の月のうけ御代さ
え海のたるに海は霜の跡かりし千年をいつくとこまさまさ

松

君の松とのみちとせよまちやつめに海つきとみゆ風に三入
友山の松の陰はいつるての左こ流かくえりて海のなし
秋の父よ峯の風のみろしり声ち御さね松のこまる
のこりよく我くらていうつれは君のはまれつかんて

枯

めくみり木ぬとまる与みりてをきうすきこゑの夜よぬ毒
まとえんてさく拆まぬ竹あなすみさうさき田の枯の尺毎し
ゐれくろ下葉のうえをかくとく霜くにはそのかりれ枯やくやさ
時志のさしき枯紅葉に露こすときこのをれは霜のこ又音

草

かとわりこ霜の下草よとの稀のきすのかいまやしをといふく
君くりとも思ふ流れより月ともてさ月行へさ草え草稀い
時えて猶君しいゆいぬくせ人行中は音の萩のつまれ
御君ぐんち草の茎え花とつ摘てしたてつうえ名木中ま

花

むかしくは桜のゆへすてし此世の人のなくひやいかな
みやこの花もちるなれとも昔の秋ハなしとしらる
これを見るもとおもふに星とめて月なかまな月をこそまて
冬こもり年のうちにいさきつかへかき袖のおもてにちる梅の花

祝

君か代よろつ世すゑしめすのもとに花ちるさしいのる
りうくの千年のふて作り桜かいかしとわきち風まいとる人
かけ月つや見せぬ菊のしもにむきかせいしそれ志るか
あさひ代はりのとせとわき人やのとくみつるこそ

山家

霞のみふかきしるへにたちかへりしるし自の春ハくる
小倉山松にかくれて茅の庵中に穏やかく方そ涼し
あけてみれは白の雪花るを雪明ぬれのうす雲の門
冬ならて昔しくみて松の庵竹篭のなに戸ちるかなさか

秋

いかにても君のいへわけ梅もおもはしらすの風の風
しは花にてすきれ月影なくかやしき歌へうかり
これ草は昔秋ともみそめてりくらにやうち秋の花人
四つのさい鶴ハちらく女ならしうちのえりといかく水く人

恋

春乃よは霞ふかくゆきかひのなみもとし月のうら
いとせめてうきこゝろの花いかりはなれ行しほのさよいふ文のさき
いふせんこゝろはなほのこゝをしれとわけて袖ぬれ我のかなしき
にほひのかたりとすれみすこたりいかに消にて袖をかな涙

述懐

涙川ながるゝ月かこゝろにこそ心にかはらて末は下にくらへて
我こゝろ三月の終の月の君にこゝろきこさ袖の花のかり
秋のはいかにならんのちのおもひやありこゝろ末は葉も涙
まゝそ思ひこゝろとくりて命のはしのかけてにしろさきさ

釋教

草木叢林随分受潤
二様やそのあまねくうるほふ者なるそのくにきりまして
除世熱悩故清涼
六月のてりもそおもひるのかれ涼しきにいかなとらんいかと
衆罪如霜露　恵日能消除
そのつみるうき世と秋の草もともに情の露きえゆく影
如寒者得火
いかさまの冬の夜の埋火に夜乃ほのほのきえぬかと

建保五年四月しや内裏小にて乃號の字をとへて
わも詩をつくらしめへきてつまつくありしかは
えしはかりかむ也や識ようき方らむくろん侍しつ
つちすおもひそへ

春

芳節恣晴宜帝柴　又花照耀乞春衣
梅の花のいろと白いはうしとはしらす雪はよのきこえのいろくれ
澄風吹消冬深盡　山氣節露吹月厳
多様の人の花と遅くとらせまほしきなを吹しはるなかりせは
宸宮霜杉葉重　早梅繞從香交錦

春ちくへあまし志も音のおかれはららとしくるらんそまれたる
宋眠從負南藩月　賓鷹從今啟小荒
音ふく嵐ゆるかきの風に綿花の香や立すまて来
絹京漸深情感頻　林叢鳴谷音香夢新
春風の吹はとうる世くやとわすれ月の部にはゆへふよし
妓桜花從映紅錦　旗鈔出歓生踏此不塵
門を梅の風ふしつしいろ花こそのうれ木れしものなり
詩吹出解禁花下　綺羅笑酒月残寺
ゐの花と月とみ年こえされはみなのありつるかと
幸逢四海和安世　除水登山性閑人

つんそ花ちる山ハ千ましハもとかすそうとき こそと丸星人

節房禮庵風京好　香枝細馬手相路

世忠てね打月夜ハ霧もハ一宇ハうりといふ里ったつ神

皆難葉貌花寒水　気啟宵挽月ハ市岑

人見ハまもしハせハもれん花ハあまね山ことくハりやて家

斜岸夕陽暮秋　古渓作雨晩来深

久ハいてもりえて花にらろハ花にもてくとも春の夜の

栄々着雲物至斬　垣柳抹鶯声動ん

いるそんぬして桜乃世ならりハゆいら霞もその心そ

一春芳節猿京言　躑躅初安富安深更

花おとし山の梅とまて三人ハ往生の月しハかけまとかなり

花埋南山草ハ漬跡　雲連蒼海泡羅天

須弥のうらえハ手ハ流しいすれをうしゆらのくるける

草庵好重一返遅日　花樹月前一夜年

雪ものをつりぬハ何もえもの風形ゆき花のさうまきらつして

王年終月桃館宿　紅樓高掃夕陽過

山への月よのもとハ山よにぬめてむりしをせとも忘れけれ

釈枝梅香三忘蓬好　三本非同言山岩眠

打山まんとれえ花のなりそて、春ハいくされ 春の霞そ

禮呈翠竹村雨深　露篠草葉前ハ小敵

すきこそんしもの昔を忘れぬあしたりにしな此あし

相容幽僻庭有芳　推夫独往弄黄花

春はいはしま葉のさくら遅ゝきしよこ梅かゝ今の中にこれの花

九日独登東方月　瞻望哀吟簷月斜

こしのこゝろやかりねの東枕中へのぼりておぼかすむすかな

夏

夏来新樹葉除暗　當歸愛山不得瞻

雪と霜の冬にはゆきえみなこれむすしきよりゆへあはまつえさ

画脚白中無霜草　梧桐新底夜風簷

かすみゆいしへのすゞしくありて涼し白さこそあれ

孤燈未結吟魂夢　閑窓相對忘晨織

むかしのとのみきこえし軍にも京より南やかれ秋の

面後終宵新枕轉　独宿如萬水東流

松のえの松のしげ涼風こころにせきかれ思ふそらふ

露迷吟夏人称秋　黄光悠人枕不知

此ゆふまこかしうへあのまふ雨しく当

石耐餘花多栽種　庭槐一葉且辞枝

ゆきこかりはるま木にいとすゞしあき秋の

晩秋　夕陽深去村樹　厳雨川源方丈池

秋風のはなはあまるはなれひらり小草迷乃茂る月やちるいけ

漸々微風吹似篩　白於林亭戌中施
すゞきさの昔あまり秋こそとや此ゝ月にかゝりにけん
淩汗從思衛鼓早　楚山康陶今定作明
中すらにきてゐる筆道葉らもすそ花鈴ゝ流しくやかなさ
似忘風力贈来容　南澗泉声是浣衣
さけんの森の下にゆく花の東風にけにゝ吹見
蛍照洲烟蒼浦月　蛙降呼雲樹夕陽指
よるをそらさきみるきり月のうらひあんねるの指く
簍篷云々乞秋変　比芥思餘老退拋
風後ゑるあさのすゝつゝく夜一とよるれとにらくみけそ吹

秋

金穎忽生残暑退　撰詠古集早秋詩
秋きぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる
乱風萩葉傷人夕　蟲語荷花結子時
をぐらの垣根にゆく萩の露に分けいる人のまになびきとさ
柴戸掩空朝雨冷　草庵待涼暁天遅
涼風の萩のうらばにうちしぐれ雨の庵の音も遅れ
蕭條原野雁栄空　雲路久出高文遠秋滋
うら枯るゝ秋の日影もみゆるや松のもと風のまそ
秋山遊遠秋望遠　仙室泉声老故涼

三両の錦代しきこうて本りふりりかゝられぬめのあせれうて流

賓園礁梓白鷺飛　酔客従誇白鶴被

とのつま秋のあつ猿とあふかなてかつりこきの中つくれのて

短晨偲楊雲物冷　蕭條京久望方幽

あ狩のそじまふりちの秋風に吹しくりまよはかもとかゝし

是茂紅葉山人路　逢到林花商客舟

旅のよの月はいつもはやりうしとのつ和の海ちのつり舟

隈梓暁寒林上月　行夜多露池中秋

露けゆ夜もやとめ夜支くしくるを船舟ハうれ思のへ乃秋

秋風吹葉空催淚　白露覧零蓮花

あらしの山ふく昨日の紅葉にふき秋く秋の林よふあ狩あかん

冬

三連四環椎節催　今風不発冬云冬

たゞやまれつるゝにふかくつもる紅葉のふかき木ゝに冬とへ

長河暮分失行客　遠路山風中途鐘

ゆこゑきこえしかふけふの山もとゐくらしのそかへのあひのつむ

蘿有織花繞紫苔　林無葉ハ葉落松

いろいとりの葉ハ紅葉ともいろうつくしてふかめすゝうまの紅乃松

郊門路僻今誰問　霜上樹深麋鹿跡

うすくこきよ霜の紅葉を風てふくてかぜさふ木枯のあと

此氏双稼画冬景節　田畝有年一万囲媛

とこ衣ろきなとすへくゆつきぬるに入りぬいそあさ

治世修聲咽詩露　致浄喩孔孟近息

かまうとんの是ふ冬枯くゆひきこゑのかそく

吹嵐排雨斜陽見　字浪閑沿流水去

ゆり田る古井ふ浮雲語りしても君公のなけ

掩飾終朝頭未流　覧見愚進退跡死殊

まらくのうのとみき君友昔といまとあてゝを程

界嘗昏民思詳筆　當初出襟尚難堪

おりしやは雲下よなとの程のとき世のきに合たり

侵明君久白満筆　悰子鶴姿弦第三

息乃久いひかよろうしそと月雲花の程りすいとゆ

高尚昔容進路雲　鄭公舊跡同浪嵐

うらたく松こら志ゆのあろとてくおりへくとう

家僮仙侍皆拋我　寒月春花屋与誰積

我取とんしいすくまこうれ言友とよそるそ程とかくし

宝暦二年十一月[illegible]

[illegible]

於當家當流之以從定書之

享禄二年七月日

下総介頼久